

コラム

マ ネ リ と

32年間続いてきたフジテレビの看板バラエティー番組「笑っていいとも」が終了してから約2ヶ月が過ぎた。「笑っていいとも」は、放送時間が平日のお昼ということもあって、会社勤めの人にはあまり馴染みのない番組であったとは思いますが、何しろ32年も続いてきたので、好き嫌いは別として、1度や2度は目にされているのではないかな？と思う。もっとも、本誌の読者層からするとバラエティー番組に対する関心は、ほとんどないのかもしれないが…。

番組の内容を念のため説明しておく、司会者役のタモリ氏が日々変わるゲストのタレントと談笑し、簡単なゲームなどを楽しむという至って単純明快なもの。特に目新しいものもなく、来る日も来る日も似たり寄ったりのことを繰り返すだけの番組であった。だが、これがどうしたことか好評を得て32年間も続いてきたのだ。映画や時代劇で言えば「寅さん」や「水戸黄門」とでもいったところであろうか。同じパターンの繰り返しでありながらも飽きられることなく人気を集めてきた点は凄い。大いなるマンネリズムといったところであろうか。

ところで、何故、タモリ司会のバラエティー番組「笑っていいとも」の話なのか？とお思いであろうと思うのだが、話は約30年前にさかのぼる。

当時、学生だった筆者は、大手広告代理店を通じ、タモリ氏の意外なものの考え方を耳にしていた。その概略は、およそ以下のようになる。“人間欲を出して次々と新しいものを求めて行くと必ず失敗する。余計なことに手を出さず、毎日、同じことをおこなってればよい。それが一番幸せだ”と。

ありふれた考えとも思えるであろうが、当時、すでに売れっ子であったタモリ氏が“余計なことに手を出さず、毎日、同じことをおこなってればよい”などと考えていると知った時は少々心を揺り動かされたものであった。普通ならば「もっと活動して成功する～」とか、「次は世界に羽ばたく～」とか言いそうなところと思うのだが、タモリ氏はそうした考えには興味がないと知って驚いたものであった。

その当時は、驚いたといっても漠然とした印象程度であったのだが、暫く経った後、タモリ氏はある種徹底した保守の考えの持ち主であり、自由競争や規制緩和の考えにも否定的な人と理解するようになっていった。通常の企業等であれば、儲けができれば、更に新商品を送りだして儲けようという話になるところだが、タモリ氏流では、新商品など開発しようとするから倒産の危機になる、今ある商品で儲け続けられればそれでよいではないか～と変わってくるのだ。タモリ氏は今日の安倍政権

チ ヤ シ ン ジ



社 海 樹

等の新自由主義的な考えとはどちらかと言うと対極側に位置しているのだ。

また、確かに「笑っていいとも」のような娯楽・バラエティー番組は、あってもなくても、日常生活に直接影響が及ぶような性格の番組ではなかった。しかし、人々がテレビを見ながら寝っ転がり続けていては、戦争に繋がらないことだけは言えると長い間思っていた。

そのタモリ氏が長年司会役をつとめてきた人気番組が2013年度をもって、特段に視聴率が悪いわけでもないのに突如打ち切りとなったのだ。そして、番組の最終回前に安倍首相がゲストとして出演したのだ。これはただ事ではないというのが筆者の偽らざる印象なのだ。何故、新自由主義的思考とは対極側にあるタモリ氏の番組の最後を選んで安倍首相が登場したのか…と。

そんなことを考えながら街の中をブラブラと散歩していると、あるものが目にとまった。それは、自衛隊のPR雑誌だった。オールカラーA4版で大手出版社のアイドル雑誌顔負けの立派な作りとなっていた。聞けば、飛ぶ様に売れているのだという。雑誌を開いて読んでみると、誌面の構成も非常に凝っていて、企画が練られていることが一目でわかるものであった。その他にも自衛隊関連のアイドルものがどんどん作られているという。これで

は近いうちに日本のテレビもマスコミも自衛隊に占拠されてしまう…、それくらい良くできていたのだ。

自衛隊は今や広報活動に全力を注いできている。写真1枚とて第1線で活躍中のプロカメラマン等から学び、切磋琢磨しているという。自衛隊の人気はどんどん上がりつつあるが、その理由は、安倍政権等の思惑による面もあるだろうが、自衛隊内部の努力という面もあるように見受けられた。自衛隊は、同じことの繰り返しではなく、新しいことにどんどんチャレンジしている様子も伺えた。安倍政権であれば、何と素晴らしい挑戦の精神と絶賛するところなのである。

さて、ここでひとつ思い返してほしい点がある。それは、はじめに紹介したタモリ氏の考え“次々と新しいものを求めて行くと必ず失敗する。同じことをおこなってればよい”だ。もちろん、失敗することが必ずしもいけないことではないし、同じことを続けることだけが良いことであるはずもないのだが、しかし、現代の文脈の中では、マンネリとチャレンジが対比されながら特殊な使い方をされているように思えてならないのだからいかなであろうか。